

六までのせてゐる。これは現今の書目と對比して見ると面白い。

編者の親切は單式印刷のみならず、解説、誤字一覽表に示されてゐる。一覽表により、本文の誤字、脱字、當字の訂正が出来、解説により本書目以外の傍系的書目の出版を知り得る。面白き事は、嘉永安政の頃出版された寫本唱導集品目なる寫本目錄に「若し御手元にて御寫し取扱下候は、一卷に付見料貳匁づゝと相定め」云々といふ奇抜なるものあるを知り、更に興味を此の方面に向けられるであらう。

本書は三百部の限定版で、書史學上重要な位置を持つものであるといへ、非營利的な出版といはねばならぬであらう。此の點、此の業績を遂げられたる編者に捧げる感謝と共に東林書房店主にも同様感謝の辭を捧げる。

(菊本文四七八頁、價五・〇〇、京都市烏丸通二條、東林書房)〔寺尾〕

## ●紫香樂宮趾の研究

滋賀縣保勝會

著者肥後和男學士は前に大津宮趾の研究に際して遺趾の發掘と同時に文献的考察を試み兩方面から結論を導き出さうと努めて調査方法に独自の境地を拓かれた。本書にもその態度が鮮明に現れてゐる。

内容は遺趾の調査報告——一、信樂谷と内裏野、二、調査の經過、三、遺跡と遺物及び、四、文献による研究と、五、結論より成る。前者に就いて斯かる大發掘を成功的に成し遂た裏にひそむ辛苦に敬意を表したい。文献的研究は續紀、正倉院文書等の斷片を繼ぎ合せて宮寺の外觀變遷を攷究しそれによつて遺趾の性質を明らかにしようとする非常なる努力の偲ばれる一文である。遺趾の發掘はかく文献の採集をまつて全きものとされるのであらう。其上に立つて文化史的方法を試みる著者の意圖の發展を祈り古代史上の重點である、紫香樂宮について貴重な報告の出でしを篤志者に紹介する。(四六倍版、本文九九頁、圖版二二葉、定價一・二〇、滋賀縣保勝會發行)〔藤〕

## 日本文代叢考

京城帝國大學法文學會編